

# あす 岡部健さん法人葬

## 在宅ホスピスに尽力

末期がん患者らを自宅で看取る「在宅ホスピス」に取り組み、9月27日に胃がんで亡くなった医師、岡部健さん（享年62歳）の法人葬が10日、仙台市内で執り行われる。現場に根ざした死生学研究を行い、震災後、東北大の研究者や僧侶らとともに、被災者を精神面でケアする「心の相談室」の運営にも携わった。亡くなる人を心身両面で支えた生涯だった。

東北大医学部出身の岡部さんは1995年ごろ、末期がんの女性（当時28歳）を担当したことが転機になった。女性は、治る見込みがないことを知ると退院を希望し、残された日々を自宅で子どもの声を聞きなが

ら過ごし、家族に看取られたい。この経験で、延命ばかりを重視する医療に疑問を覚え、97年に県立がんセンターを退職し、名取市内に「岡部医院」を開いた。

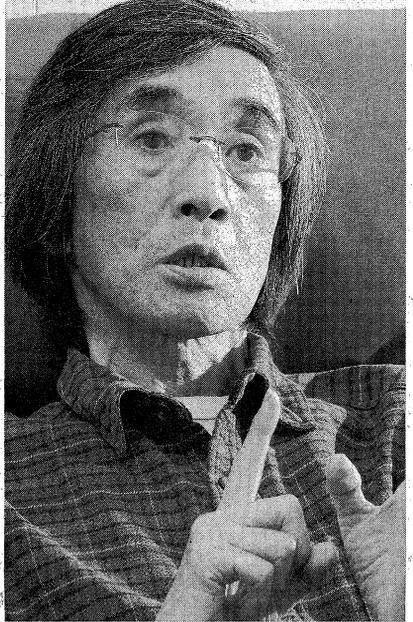
当時、在宅ホスピスは珍しく、試行錯誤で、がんの

とおしゃべりするんです。雑学が好きで、話題の尽きない人でした」と偲ぶ。

2010年、胃がんが見つかり、手術後に再発、自宅で家族に囲まれた最期だった。親交があった作家の柳田邦男さん(76)は「地道な取り組みで、先駆的な活動を根付かせた。これからの終末期医療のあり方を身をもって示した」と話す。

岡部さんが理事長を務めた医療法人「爽秋会」(0

22・3801・1236)による法人葬は10日午後1時から、仙台市青葉区木町通の仙台葬儀会館斎苑別館で行われる。また、18日午後1時半から、同区川内の東北大川内萩ホールで追悼緊急シンポジウムが催され、岡部さんを取材したノンフィクションライター奥野修司さんらが語る。問い合わせは心の相談室の桜井恭仁理事(0800・2820・2099)へ。



インタビューに答える岡部さん(5月29日、仙台市青葉区)＝飯島啓太撮影